第五回　平成十六年二月二十五日

【発表】

渡辺憲司「『山鹿素行年譜』について」

この間の加賀さんの発表に口出しをしましたので、今回少しお話することになりました。お配りしましたコピーが、一応原資料といいますか、『山鹿素行年譜』です。年譜という名前が付いていますが日記です。当時の日記としてはかなりおもしろいものなのではないかと私は思っています。出典は『山鹿素行全集』第十五巻（岩波書店）、戦前の版です。

まず日記を眺めながら、歌舞伎関係の記事があるようなので、もうよくご存じの資料だと思いますが、見ていきたいと思います。慶安三年、素行二十九歳の年、たとえば八月二十二日「蟹。丹羽光重左京大夫亭に至る。歌舞妓あり」という記事があります。丹羽光重は二本松の城主で、二本松はこの数代後には殿様が家来を傷つけるような悪い噂のあるところです。丹羽光重は素行が大変仲良くしていた人物です。

それから、次に九月七日の記事には、浅野長直、長治が出てきます。この間の御発表にもあった三次城主ですね。昼に長直と丹羽光重亭に行って、歌舞妓があったと見えています。

慶安四年二月二十五日には「武楽及び歌舞妓を献ず」とあります。二十七日にも「徳松殿二の御丸に於て御膳を献ず。歌舞妓あり」。徳松は家光の第四子で後の綱吉です。　それから、承応元年二月二十三日には内藤左京亭で歌舞伎があります。内藤左京は内藤風虎、磐城の大名で、風虎サロンの人ですね。

六月十五日に石谷将監が歌舞伎を禁じるとあります。どの程度の禁令だったのかわかりませんが、江戸内での禁止かと言われています。それから、少しおもしろいなと思ったのは、あまりの暑さで「秋に至り人多く無言の疾に罹る」とあって、皆が無言の病に罹ってしまったというんですね。他、歌会があったり、十一月には客星出現とか、何か不穏なことのあった時期のようです。

七十一頁に移りまして、万治三年十月十二日に津軽家が出て来ます。これが初出です。津軽亭に行っています。素行の最初の訪問で、信政は十五歳ですね。ここから、山鹿家と津軽家との関係が始まります。越中守になったのが十三歳ですから、そのすぐ後ぐらいですね。最初の帰国の頃とも重なります。

加賀：信政の年譜にも万治三年十月十二日に初めて素行が江戸屋敷を訪れたとあるようです。

渡辺：一致しますか。それでは、これが出典ですね。

寛文元年、素行は四十歳ですが、このあたりから頻繁に津軽亭に顔を出しています。数限りなくあるので、抜粋していますが、たとえば、正月七日に「津軽太守亭に到る」とあります。浅野長治とか、松浦鎮信だとか、そういう連中と重なり合います。三月七日の記事ですが、町野の名前を出していますね。このへんの時はまだ丹羽とかも一緒ですね。内藤、戸田、丹羽といった不良大名というか、文化人たちと一緒の仲間になっています。

寛文五年になりますと、信政が二十歳ぐらいでしょうか、素行との付き合いは最も盛んであった時期だと思います。しょっちゅう往

き来があります。

六月二日の記事では猿楽があって、北十大夫が不可解な頓死を遂げています。この頃、少しいろいろなことがありまして、五日には町野と本多兵部の家来同士が争論するとあります。こういう場合は、大体町野と対立していて、何かしら因縁があってのことです。このあたりはなんとなく不穏な時期です。

次の一〇二頁は、寛文七年十二月にお茶会の記事があって、茶菓の話とかが書いてあったので拾っておきました。それから、寛文八年正月五日には「江豚魚を嘗む」とあって、イルカを食べているようです。他にオットセイも出てきます。

延宝三年十二月に操の記事があります。それから年末に「萬介今朝より疱瘡を患ふ」とあって、息子が疱瘡にかかっています。これが正月もずっと調子が悪くて、萬介を酒湯に入れていますね。萬介が病気になった時に、大名達が見舞いに来ています。十七日の記事で「萬介病中、松浦太守三度来臨、大村太守・津軽太守・稲垣太守・本多太守各々再三来訪」と出て来ます。つまり、この大名達が当時非常に近い関係にあったのだということがわかります。二十三日に、久世大和守、本多、大村、津軽にこの頃のお見舞いのお礼を言っています。このあたりも懇意の付き合いの連中ということになるでしょうか。延宝五年も五月十一日「津軽公来臨」、それから二十一日「津軽公に到る」、二十五日も「津軽公に到る」とあって、非常に津軽と親しくしています。

六月には「今年五月旱」とか出てきます。山鹿素行年譜の特徴は非常に天気関係の記事が多いということがありまして、天候史などでは注目されています。

次に一七二頁ですが、儒者ですから、お母さんが亡くなった時は大変なことになります。十六日、「津軽公・大村公来り弔す」と弔問に来ています。石碑も建てたということが出ています。十二月四日は「各々魚味・濃茶を賜ふ」とあって、よくわかりませんが一応拾っておきました。法事が何かでしょうか。そういう記事がよく出ます。次の頁ですが、先程の息子の病気の時と同じで、母親が亡くなった時に来ている人を見れば、津軽も来ていますから、非常に深い関係だったということが確認できます。さらに二十六日には自分の娘の縁組みが決まった記事が出ます。例の津軽藩士喜多村源八と婚約したということです。

それから、ちょっとおもしろいかなと思ったのが、延宝五年の記事の最後ですが、「今年秋冬の間、江戸中の町皆跳遊を為し、今に到るも止まず。路辺の小童も亦二三輩相聚まれば歌ひ躍る。人皆怪しむ。俗に云ふ、大坂役及び嶋原役に此の兆あり」ということで、子供達が集まって騒いでるようで、何か起こるのではないかと言われています。素行はそういうことを書きたがる人なのですね。

それから、近衛家の関係で、延宝六年六月二十九日、「今日牒を弘崎に奉る。中朝実録校見相済む。是れを津軽に捧ぐ」という記事があります。『中朝実録』というのは大変大事な本で、日本中心主義というのをここで言い出すわけですね。このあたりは東アジア全体の中でもおもしろい時期で、清との関係なども興味深いのですが、この本を津軽に贈ったということは思想的にもおもしろいと思います。蝦夷への出兵などとも関わって注目されます。素行は江戸においてはもちろんですが、信政が津軽に帰ってからも手紙を出して、付き合っていたようです。

二一六頁では、二十一日「今日津軽公の土蔵を開く」とあって、「喜多村源八の道具を津軽公土蔵に預けおきしならん」という頭注

がありますが、非常におもしろい記事です。それから、三月二十六日は、「津軽公著御、御菓子杉重を祝ふ」、二十八日には「生鯛二頭」とあります。そして、四月三日、松浦太守は鮧をくれたらしいのですね。四日は、津軽公から御土産としてオットセイを一箱もらっています。オットセイというのは強精剤になるのでしょうかね。六日には女婿の喜多村源八が出てきます。　それから、九日の記事に濟松寺というのが出てきます。これは素行に関して重要な寺です。高田馬場の早稲田大学の近くにあります。素行の墓もあります。濟松院は春日局の前の大奥の実権者で、キリシタンではないかと疑いをかけられています。素行もキリシタン説があって、当時は少し変わったことをするとキリシタンではないかと言われたようです。

十二日の記事では「津軽公に到る、学話あり」とあります。「学話」という言葉はおもしろいですね。その実態をもう少し具体的に言っているのが、二一九頁の最後、二十七日のところで、「津軽越公を饗す。津軽玄蕃・喜多村源八・山鹿八郎左衛門侍座。兵論・道学の議あり、初更に及ぶ。蕎麺を献ず」ですね。

次に二三四頁、これは夜中に雨が降った時、津軽公から蘭の花が来たというのですね。これはいったい何だろうかと思います。それから、二十二日に大風だったらしいのですが、「雨なくして風吹き」畠が荒らされたのですが、その時に「松浦肥太守・大村因太守・津軽越太守・本多備太守使者を以て風破を問ふ」とあって、こういう大風なんかの時にも見舞いをするというのが注目されます。

二七〇頁、二十七日、暇乞いがあって、津軽太守が来臨して疎膳を献じています。そして、「今日大久保加賀守、二の御丸に於て御茶を献上す。傀儡あり師名永鑑」とあって、これは虎屋永閑ですね。

次、二九三頁の四行目、「大星目録」という兵法秘伝書を津軽太守に与えています。一応ここで兵法関係の師伝は終わりなのですね。免許皆伝ということになるわけです。一つ大事なところだと思います。津軽太守が息子の平蔵主と来て礼をしています。「太守悃遇し饗応あり」など、なかなかおもしろいです。延宝九年三月二十一日、「今日津軽太守参府、之れに依り晩に及びて彼の亭に到り、経ちに大学の宅に到る。晩に及びて津軽大学・同監物来礼、太刀折紙持参」など、とにかく深い関係を感じます。

それから、三二九頁の最後に御能の記事が出ています。三五七頁のあたりは口切りのお茶のことですね。食べ物類の記事が出ています。これが天和元年ですね。

天和二年になって、三九四頁、二十三日には「串鮑」が出てきます。このあたりから素行は瘧を患うようになります。次の四八六頁、死ぬ直前になるのですが、これは有名な話で彼は夢を見るのですね。「葵の紋の小袖を著る」という夢を最期に見て死にます。その少し前に二十三日、津軽の使者牧野只右衛門が来て、「往年の蝦夷の事を談ず」とあります。これが気になってることなんですね。蝦夷の来襲と津軽がどう関わるかというところが興味を引かれます。

この年譜に参考資料が付いていまして、津軽関係のところだけ引いておきました。津軽岩之助は大学の子で、山鹿家に寓して修行しています。越中守はいいですね。そこの回数はそれぞれが年譜に出て来る回数です。越中守は一九二回出て来るのですね。津軽玄蕃は信政の弟で、共に大星伝授を受けています。次は黒石の信英です。津軽将監は三次の長直のところにいて、後に津軽に仕えます。素行と姻戚関係で結ばれています。

最後に家譜を引いたのは、素行のお父さんの話を少し申し上げたいと思ったからです。貞以というのが素行の父親です。このお父さ

んは町野幸仍に頼っているんですね。素行が十五歳の時に父親が死にます。貞以は関一政に随って伯州に行き、そこで同輩を殺して会津に奔り、そして町野を頼りました。ですから、父の恩人にあたるんですね。町野幸和の名前が度々出てくるのですが、そういう関係です。

それから、三四とあるのは津軽信政から素行宛の延宝五年八月十四日の書簡です。延宝五年というのは信政が三十二歳になっていますから、付き合って十五年ぐらい経っています。素行の母親妙智がおこりになっているのを気の毒だという、かなり個人的なことを書いています。また「内々拙者願の屋敷替の義」とあります。そういう時にも陰になり日向になり、素行が動いているということがわかります。後、自分にねぶとができて気持ちが悪いなどといったことが書いてあります。こういう書簡が信政と素行の間にあったということです。

六八頁は素行と息子やその他の年齢というか、関係がわかるので挙げておきました。素行にとっては年取ってからできた自分の子供のことが気になっていたようなんですね。死ぬ直前、子供の藤介はまだ二十歳です。

弘前市史の素行と津軽家の関係に関する記述の原資料として、今回お話させていただきました。丁寧に読んでいくと、もっといろいろおもしろいのではないかと思います。平戸の山鹿家に少しあるのですが、全体的なものは戦争でなくなってしまったようです。

【ディスカッション】

武井：信政と素行というのは二十歳ぐらい違うのですか。

渡辺：信政が十五歳の時、素行が三十九歳ですから、二十四年違いますね。

武井：信政は先生として素行を考えているわけですよね。他の大名連中も素行のところに訪ねて行ったり、お見舞いをしているのは、先生の家に行っているという感覚なのでしょうか。

渡辺：基本的にそうですね。町野とそれほど年が離れていたかどうかはよくわからないのですが。多くは林家に付きますよね。他に付かない連中がいて、それは外様の津軽とか松浦とかで、それらが山鹿に付きます。

武井：やはり外様ですか。

渡辺：そうですね。親藩が山鹿に付くことはあまりありません。浅野でも幕閣の中心から少しずれています。親藩もいて、それが松平定綱なのですが、定綱は幕閣の中心から少しずれていますね。素行にとって　出世としては親藩の人と付き合いたいという思いももちろんあると思います。

加賀：素行にとって信政はどの程度の存在だったのでしょうか。

渡辺：自分の息子を託しますし、娘も入りますから、かなり重視していたと思います。津軽大学は後に失脚するので、津軽家での山鹿家の位置は低くなりますが、素行が死んだ時点では、松浦と津軽に全部頼むという感じです。子孫はずっと続きます。平戸の山

鹿文庫を伝えているのも山鹿家ですし、青森では幕末にキリスト教の伝道者として活躍します。そちらの方は濁らずに「やまか」というようです。「やまか」と「やまが」で系統を分けています。

加賀：どうして、山鹿は津軽をそんなに気に入ったのでしょうか。

渡辺：思想的には辺境の地に対する興味もあったでしょうね。松浦も津軽も古くからの大名ですから。でも、なぜかというのは難しいですね。パトロンになればそれでよいというところもあったかもしれません。

加賀：津軽が近付いて来るので受け入れたという感じでしょうか。

渡辺：もちろん、津軽の前に丹羽や浅野との付き合いがあって、浅野との縁故から津軽がという側面もあると思います。町野がキーポイントかもしれません。

武井：三十四頁の慶安四年二月二十五日と二十七日の歌舞伎は、江戸城ですね。この上演は有名ですね。

林：『徳川実紀』にも見えますよね。放下と歌舞伎をしたようです。

武井：「武楽」というのはあて字なのでしょうね。その次の四十二頁の禁令の記事はおもしろいですね。承応元年の歌舞伎の禁止というのがはっきり日記資料に出てくるのは初めてではないでしょうか。

林：このあたりの日記資料はあまりないですよね。

武井：『歌舞伎年表』とかには書いてあるけれども根拠がよくわからないというような中で、これはおそらく一等資料ですね。

渡辺：ただ、山鹿素行年譜の信憑性というのは考える必要はあると思います。全部が素行の自筆で、年次的な記録なのか、それとも一括してどこかで書き加えたのかという問題はあるんですよ。確実にこれは素行がその当時に書いたのだという記事もあります。そうとしか読めないというのが、天気とか、あるんですね。でも、こういう禁令とかいうタイプの記事は意外に怪しいかもしれません。後で書き加えた可能性もあるんですよ。そういうことを躊躇しておかないと、日記に出ていたとストレートに書くのは少し危ないかと思います。お茶会や天気などに関しては後から書き加えるということはないと思うのですが。後、素行の感情が出ているところが結構あるんですよ。たとえば、赤穂城は素行が造ったと言われていますが、日記の方を見ると築城にはずっと参加させてもらっていなくて、出来上がった時に見せられて少し涙を流したとあります。そういう感情が見えているところはおもしろいなと思います。

青木：食生活の面では、喪中に本当は肉を食べてはいけないけれども、来客の場合は食べるというのが見えるのはおもしろいですね。時代的に言うと、蕎麦切が出るのが寛文ぐらいなのですが、蕎麦が出ているのがおもしろいです。

渡辺：二本松の丹羽は悪い殿様だという噂が中山道を流れたりするような人だったらしいですが、そういう人に関する記事が多く出るのも結構おもしろいと思います。二本松の方に調査に行った時、「戦争で焼かれた」とみなさんが話されるので、戦時中の話かと思って聞いていたら、会津との戦いで焼かれたと言うんですね。寺が非常に多いところです。丹羽なんかは、歌舞伎をしょっちゅうやっているし、史料が出たらおもしろいと思いますよ。

武井：慶安三年の丹羽亭で歌舞伎というのは古い記録ですね。

渡辺：長直も史料が残ってないんですよね。かなり調べたのですが、なかったですね。

林：「歌舞妓」とはっきり書いているのがおもしろいですね。

渡辺：素行文庫にメモがいくつか残っていたので、それを丁寧に見られればもう少しわかるかもしれません。積徳堂文庫というのですが、その目録の中には入ってなかったと思います。

武井：日記の書名は「山鹿素行年譜」と書かれているのですか。

渡辺：書かれているのかどうかはわからないです。誰かが作っていったのかもしれません。部分的に日記があって、誰かが編纂したのではないかと思います。そこのところにこの日記のおもしろさと難しさがあるわけですね。